抑圧を笑い飛ばそう、イスラエル内パレスチナ人

マイ・アワド（カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校博士課程のパレスチナ系米国人）著、脇浜義明訳

電子インティファーダ、２０２６年2月１６日

コメディアン兼弁護士のアメル・ザールは、2022 年にイスラエル軍に殺害されたパレスチナ人ジャーナリスト、シリーン・アブ・アクレを偲ぶため「プレス」と書かれたシャツを着用した。ザールは 2025 年 5 月 30 日、オレゴン州ポートランドのパレスチナ児童救済基金支部主催のチャリティーコンサートに出演した。(John Rudoff SIPA USA)

２０２５年１２月下旬、パレスチナ系米国人コメディアン、アメル・ザフルが、彼の故郷であるナザレで３回公演のうち最初の公演をした直後、イスラエル警察が踏み込んで来て、彼の身柄を拘束した。はっきりした容疑もなく１時間半にわたって、弁護士の立ち合いも許されないで、尋問された。尋問後彼は劇場へ帰った。観客はもういないだろうと思ったら、驚いたことに、観客は待っていた。彼はステージに上がり、予定通り残りの公演を行った。

ザフルの拘束は孤立した事件ではなく、イスラエルの植民地的暴力を公けに語る—たとえお笑い芸や SNS であろうと—パレスチナ人を、検閲し目の敵にする広範なパターンの一環である。

昨年２月、ハイファのパレスチナ人コメディアンのニダル・バダルネがイスラエル人人質のジョークを言ったことや、イスラエル内パレスチナ人に対する差別やガザの大量殺人を批判したために逮捕された。(ユダヤ人コメディアンが戦争やジェノサイドでジョークを言っても逮捕されない）イスラエルのチャンネル１３の人気番組が、彼の「アラビア語ジョークをインスタグラムのページでヘブライ語に翻訳したことから始まったバダルネ非難のメディア・キャンペーンを受けて、当局が彼の家をガサ入れした。チャンネル１３の翻訳後数日間、バダルネのＳＮＳアカウントには、殺害予告やヨルダンへの追放などの脅迫メールが殺到し、その後数日間に予定されていた公演が取り消された。

ザフルは数時間の尋問で釈放され、法的起訴などはされなかった。しかし、たとえ短時間での彼の拘留目的ははっきりしている。シオニズム批判は高くつくぞという脅しである。彼は後に、行政拘留、つまり罪状も裁判もない刑務所収容するぞ

と脅迫されたと語った。行政拘留というのは、１９６７年占領地（西岸地区とガザ回廊）でイスラエルが一般的にやっていることで、何カ月も拘留し、何度でも更新するので、無期限拘留になる。

鏡

こういう植民地支配的脅迫にも負けず、ザフル等パレスチナ人コメディアンは舞台に立ち、公演を続けている。ザフルが当局に一時拘束されたとき、観客が彼を待っていたという事実は、彼や観客を威嚇する当局の試みは成功していないことを示している。

ザフルは大学教育で弁護士の資格を持ち、米国籍を持っているので、外国籍を持たない多くのパレスチナ人に比べて、ある程度の著名性と相対的特権性がある。しかし、彼のパスポートと法的背景は彼をイスラエルの脅迫から守らなかった。ひっきょう、彼はパレスチナ人で、それ故彼の演技は脅威と見做されたのだ。

パレスチナ人の漫談はパレスチナ人の日常上生活の特徴を反映する鏡である。ステージの上ではコメディアンは、家族のあり様、結婚、人間関係からジェンダー役割、アラブの文化基準を題材にして笑いを取るだけでなく、パレスチナ人が日常生活で持っている不満を語る。この語りの中には、イスラエルの入植植民地主義の実行が作り出す現実が織り込まれている。深夜に突然襲ってくる逮捕、自宅への襲撃、空港での嫌がらせ尋問、検問所で長時間待たされること、イスラエル軍との遭遇などが題材になる。コメディアンが語るすべてが政治的であるわけではないが、その背景には政治がある。

観客がそういう現実を抱えていることがコメディに政治性を与える。ウィスコンシン大学地理学・国際関係学助教授のリサ・ブンガリアが「権力を笑う」という論文の中で述べているように、漫談とそれが生み出す笑いは「トランスジェンダー」である場合が多く、「我々の社会世界を支える規範や『合理性』を疑問視することによって、既存の権力関係と既存の階層構造を不安定にする」働きをする。イスラエルの行動、矛盾、不条理を暴露することは、パレスチナ人に押し付けられたものを疑問だらけの、公けに嘲笑されるべきものに変える。

パレスチナという文脈では、漫談はイスラエルの植民地的支配を嘲笑するだけでなく、代替えとなる未来を想像する場ともなる。オスカー・プリムズとマルセル.C. ドーソン共著の論文『漫談を真剣に考える』は、入植植民地文脈では漫談に注意を払へと私たちに勧め、漫談が真実を暴く大衆教育の場となり、脱植民地的未来を想像する場となると説明している。著者たちは、例えばマオリ人のコメディのような先住民の漫談を、「米国の入植植民地主義に関する議論に資する形で『人種的思考』を批判的に考察することを奨励する」対抗的談話となると注目している。

コメディは、先住民コミュニティを単なる受動的被害者と見做すのでなく、彼らを複雑で政治的に関与する主体として提起するのだ。

死を前にして微笑む

＊ザフルの有名なジョークの一つは支配的談話を覆すパワーがある。彼はイスラエルのとっては建国となる１９４８年のナクバについて、「彼らは我々の土地を盗んだ。家具付きでね」。「土地を持たない人（ユダヤ人）のための人のいない土地パレスチナ」というシオニストの談話を扱ったもので、彼らはこの談話を長く使って先住民パレスチナ人を追い出し、パレスチナ人の土地と住宅と財産を奪うことを正当化してきた。実に単純なジョークだが、パレスチナが無人の地であったというシオニストのとんでもない談話のウソを暴露している。

マオリ人の語りが対抗談話であるのと同じように、ザフルのジョークはパレスチナ人を受け身の被害者、哀れみの対象として描いておらず、イスラエルの植民地主義的論理をあざ笑い，先住民談話を巧みに表現する、知識の豊富な主体として提示している。

彼は他のジョークで、同じような戦略を使い、パレスチナ人は入植者ヤコブに感謝すべきだという皮肉を提案している。ヤコブはシェイフ・シャラー地区でムナ・アル・クルドの家を盗んだユダヤ人で、「私が盗まなければ、他の誰かが盗んだであろう」と言った。ザフルが感謝しようと言ったのは、ヤコブがパレスチナ人から盗むことは避けられないというシオニスト入植者の論理を表現したからである。彼は後にこのジョークを舞台から現実に移し、その動画をインスタグラムに投稿した。彼はシェイフ・シャラーへ行き、ムナ・アル・クルドの元家の前に立ち、その皮肉の感謝を述べた。ヤコブが何故感謝するのかと尋ねたとき、サブルは「あなたが盗んだ人物なのでありがとう。あなたは素晴らしい人だ」と言った。

一方バダルネの方は、、逮捕された後も動じなかった。「イスラエル人は我々の権利を何一つ没収できない。とりわけ、死を前にして微笑む権利を奪うことはできない」と言った。この言葉は、パレスチナ人が現在直面している現実を表わしており、究極的問題を表現している。イスラエルは日常的にパレスチナ人を殺害、逮捕、威嚇しており、ガザでは世界が見ている中で7万１０００人以上の命を奪ったが、実際の数はもっと多いと思われる。こういう前例のないレベルの残虐行為をやっているが、それでもイスラエルの支配や盗みには限界がある。笑い、皮肉、語りを奪うことはできない。

その意味で、コメディは政治を回避する手段ではなく、パレスチナ人が自らの存在と土地との繋がりを肯定し、彼らを抹消しようとする現実の中で声を上げ，主張を世界に届ける手段の一つである。